

日本18世紀学会第33回全国大会
プログラム
報告要項

2011年6月18日(土)、19日(日)

立教大学 池袋キャンパス
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

第 33 回大会プログラム

第 1 日 6 月 18 日 (土)

発表会場 立教大学 池袋キャンパス 4 号館 3 階 4342 号室

9:30 受け付け開始

10:00-10:05 開会挨拶

10:05-10:10 開催校挨拶 立教大学総長 吉岡知哉

自由論題報告

10:10-11:00 自由論題報告 (1)

「イザベル・ド・シャリエールにおけるルソー『新エロイズ』の反響」

斎藤 山人 (東京大学)

司会：玉井 通和 (日本大学)

11:00-11:50 自由論題報告 (2)

「音声の保存と機械—A.リヴァロル『手紙』(1783 年)を中心に」

田中 (鈴木) 裕子 (東京大学)

司会：玉田 敦子 (中部大学)

11:50-13:30 昼食

昼食 18 日 (土) 立教大学 池袋キャンパス 4 号館 3 階 4342 号室

または 会員控室 4341 号室

13:40-14:30 自由論題報告 (3)

「宇宙の発酵」を表象する思考の発酵 ——ディドロ『ダランベールの夢』における
イメージによる思考」

川村 文重 (金城学院大学)

司会：逸見 龍生 (新潟大学)

14:30-15:20 自由論題報告 (4)

「18 世紀ドイツの哲学者たちの「物質的観念」——ヴォルフおよびカントの用例を焦点として」

渡邊 浩一 (京都大学)

司会：齊藤 涉 (大阪大学)

15:20-15:30 休憩

15:30-16:20 自由論題報告 (5)

「ホップズからスミスへ」

水田 洋 (名城大学)

司会：有江 大介 (横浜国立大学)

16:40-18:10 レクチャー・コンサート： 18 世紀フランスのカンタータ

会場 立教池袋中学・高等学校センテニアルホール

解説 森 立子

出演： チェンバロ 春日 万里子

ヴァイオリン 廣海 史帆

トラベルソ&バス 春日 保人

ソプラノ 原 雅巳 氏

曲目： モンテクレール「ティルシスとクリメーヌ」

クレランボー「メデ」

ラモー「テティス」

18:30-20:30 懇親会

会場 12 号館地下会議室

会費 6000 円

第2日 6月19日(日)

発表会場 立教大学 池袋キャンパス 4号館3階 4342号室

9:30 受け付け開始

自由論題報告

10:00-10:50 自由論題報告(6)

「チペンデールのシノワズリ —中国風彫飾と中国風塗装(ジャパニング)を中心に—」

鈴木 ^{ひろこ}裕子 (東京大学)

司会：小関 武史 (一橋大学)

共通論題 「表象、その多様性、変容と展開の諸相」

コーディネーター兼総合司会 鷺見 洋一 (中部大学)

10:50-11:10 趣旨説明

「表象、その多様性、変容と展開の諸相」

鷺見 洋一 (中部大学)

11:10-11:45 第1報告

「ゲートにおける建築と表象」

前田 富士男 (中部大学)

11:50-13:00 総会+昼食*

昼食・総会会場 立教大学 池袋キャンパス 4号館3階 4342号室

13:10-13:45 第2報告

「18世紀における東北の表象、管見一二」

坂口 昌明 (日本民俗学会会員)

13:45-14:20 第3報告

「擬古と革命」

渡辺 浩 (法政大学)

14:20-14:55 第4報告

「représentation と representation」

水田 洋（名古屋大学名誉教授・日本学士院会員）

15:00-15:20 コーヒー・ブレイク（質問書回収）

大会会場にお茶をご用意します。

15:20-16:10 討論

16:10-16:15 閉会挨拶



*大会参加費として**500円**（ただし学生は**無料**）、非会員の方は**1,000円**をいただいております。ご了承ください。

*19日（日）のお弁当をご希望の方はお申し込みください。

土曜日は、大学食堂が営業しております。大学周辺にも飲食店がございます。

日曜日は、お昼休みに総会がありますので、お弁当を申し込まれることをおすすめいたします。お弁当代：1000円

*大会参加の際、保育所、ベビーシッターを利用される場合は、学会にて保育費の半額を負担いたします。ご希望の方は、学会終了後領収書を事務局までお送りください。後日学会負担分をお振込みいたします。

*大会への出欠は同封の葉書で5月23日（月）までにお知らせください。

自由論題報告

会場 立教大学 池袋キャンパス 4号館3階 4342号室

イザベル・ド・シャリエールにおけるルソー『新エロイズ』の反響

斎藤 山人

(パリ第七大学博士課程)

イザベル・ド・シャリエール(1740-1805)はオランダに生を受けた後、スイスのコロンビエに居を置き、『ヌーシャテル書簡』、『ローザンヌからの手紙』、『雪の中で見つかった手紙』など、スイスの地方性を表象しながらフランス語で書簡体小説を書き残した作家である。幼少期にジュネーヴ出身の家庭教師によって読書の訓練を受けているように、スイスとのつながりは彼女の知的形成の最初期から続き、また、ジャン=ジャック・ルソー(1712-1778)の著作にも同時に早くから親しんでいる。ルソーの『新エロイズ』は、副題「アルプスの麓の小さな街に住む、二人の恋人の書簡」に示されているように、スイスの地方性の表象を、その小説作品としての構成における重要な装置としていることは明らかである。実際、この点に関しては、『新エロイズ』の「第二の序文」において、著者自身の筆によって特に強調されている。「小説についての対話」という副題まで添えられたこの序文からうかがえるのは、物語の舞台をパリというフランス語圏の文化的中心から外して、あえてスイスという「地方 province」に据えることにより、『新エロイズ』という小説作品が、かつて類を見なかった独自性を帯び、同時代の他の小説作品とは画期的に差異化されるものと、作者であるルソー自身が期待していた様子である。冒頭に挙げたようなシャリエール夫人の作品群は特に、この『新エロイズ』という作品に少なからぬ刺激を受けて書かれたものと考えられるだろう。ルソーの熱心な読者であり、『新エロイズ』におけるのと同様に、スイスの土地性とその言語的特色を書簡体小説という形で演出したシャリエール夫人の作品は、ルソーが口火を切った「対話」に対する、一つの実践的な応答であったと言いうるのではないだろうか。地方性の表象にルソーがこめていた彼の文学的・政治的な戦略が、シャリエール夫人においてどのように受け継がれ、また、どのような変容を被っているかという点が問題となると同時に、地方性というモードが具体的な語彙表現のレベルにおいても重要な意味を持ち、フランス語という言語に対して新たな反響を要求していたことも注目される。

音声の保存と機械－A.リヴァロル『手紙』（1783年）を中心に

田中（鈴木）^{ゆうこ}裕子

（東京大学大学院）

アントワーヌ・リヴァロル（Antoine Rivarol, 1753-1801）は、「明晰でないものはフランス語ではない」という言葉で有名な論文『フランス語の普遍性について』（1783年）の著者として知られるが、同年に著した書簡体の論文『熱気球、話す頭部、現在のパリの世論についての手紙』はこれまで余り注目されてこなかった。この『手紙』において彼は、当時ミカル神父という人物が製作したフランス語を話す自動機械《話す頭部》を取り上げ、その機械の意義に対し最大の賛辞を送る。彼はなぜそれほどまでにこの機械に期待を寄せたのか。同年に書かれたこの二つの著作の関係にも注目しながら、『手紙』で展開される議論の検討を試みたい。

リヴァロルは『手紙』において、「話す」という最も人間らしい特徴の一つを機械で再現したミカル神父を賞賛するとともに、関心はその実用的側面に向かう。彼は、発音を持つ、時間経過による変化や地域による訛りなどの問題を指摘し、《話す頭部》に正確な発音を記録することで、正しい発音を音声として示すことができ、それは人々に「趣味の退廃」を警告するとともに、フランス語の名誉ある「普遍性」を守るであろうとする。

すると、フランス語の文法構造の持つ明晰性からその普遍性を主張する『フランス語の普遍性について』に対し、その発音の問題を扱う『手紙』は、前著をいわば補完する関係にあったといえないか。地方の言葉が色濃く残る南仏出身であったこともあり、正確なフランス語に人一倍敏感であったらうリヴァロルにとって、明晰かつ普遍性を持ちうるフランス語は、発音においても歪曲されず遍く広まっていることが希求されたであろう。

また、《話す頭部》が、国王を賞賛する言葉を発することは非常に象徴的である。王の身体として表象される、機械とアナロジカルに捉えられる絶対王政下のフランスという国家は（cf. J.-M. アポストリデス『機械としての王』）、その言語の発音においても訛りなどの地方差のない普遍性が要求されよう。正確な発音の保存・伝達を可能とする期待を抱かせたその機械が話す内容は、まさに普遍的な存在たる王への讚美の言葉であった。まもなく革命を迎える王政末期において、この《話す頭部》という機械は、絶対王政を奇しくも象徴するものであったといえよう。

「宇宙の発酵」を表象する思考の発酵
——ディドロ『ダランベールの夢』におけるイメージによる思考

川村 文重
(金城学院大学非常勤講師)

ディドロは『ダランベールの夢』(1769年)において、当時の化学・生理学・生物学の知見から独自の唯物論を展開している。第一対話では、物理数学者ダランベールが抽象的な科学的方法論に忠実な機械論者だという点で、対話者ディドロと対立していた。しかし、第二対話以降、ダランベールは夢の中で、ディドロの思想を消化吸収することによって、化学的唯物論者に変身すると同時に、ディドロが実践していたイメージによる思考方法で、生命が宇宙規模で発酵する様子を描く。

宇宙の発酵は一元論的・生氣論的なディドロの唯物論を表象しているが、これはルクレティウスの唯物論に遡り、錬金術の伝統を経て継承されたイメージでもある。ゆえに、ディドロの発酵概念には科学的厳密さと詩的曖昧さが共存している。本論ではまず、この夢の言説がイメージによる思考の実践であることを示し、次に理論モデルをもとにして、イメージによる思考が夢の言説において、科学(思想)と詩学(思想表現)を内的に連関させていることを論じる。

夢見るダランベールは手ぶりで表した発酵容器としての「壺」を皮切りに、子宮や宇宙を象徴する類似イメージを次々と連鎖させる。ここに見ることができるのは、直線的な論証プロセスとは異なった、イメージによる思考のプロセス——ディドロが『聾啞者書簡』(1751年)や1760年10月20日付ソフィー・ヴォランへの手紙で論じた、親和力による諸イメージ間の音楽的連鎖——である。この化学・音楽モデルを発展させたものが、『ダランベールの夢』第一対話でディドロが提示した推論のメタファーだと考えられる。つまり、彼は推論を、感性ある振動弦の親和性による共鳴とみなし、さらに哲学者を、自ら音を結びつけメロディーを奏でるクラヴサンに喩えるのだ。ディドロにとって、思考はイメージの連鎖によるアナロジーの無限増殖である。したがって、夢見るダランベールは、思考の発酵作用(イメージの分化・増殖)によって、自然の発酵作用(物質の分化・増殖)を描いていると言える。第二対話におけるダランベールの変身は思想信条の変化だけでなく、いわば機械論的な直線的論証ロジックから親和力による化学的・音楽的アナロジーへの移行も表しているのである。この新たなロジックこそが、宇宙の発酵という唯物論を論じる最もレトリカルな核心部分で、思想の表現装置として機能していると考えられる。

18 世紀ドイツの哲学者たちの「物質的観念」 ——ヴォルフおよびカントの用例を焦点として

渡邊 浩一
(京都大学大学院)

『純粹理性批判』(1781 年)へと至る試行錯誤のなかで、カントは『視靈者の夢』(1766 年)において視靈者・スウェーデンボルグ批判に事寄せて講壇形而上学の靈魂論に対する懷疑的留保を示すことになるが、それに際して「物質的観念 [ideae materiales]」という奇妙な語句を用いている。「デカルトが想定し相当数の哲学者たちが彼にしたがって承認した」とされるこの概念は、「脳の神経組織ないしは神経精気のある種の諸運動」を指して言われるもので、懸案の視靈現象はまさにこの仮説によって生理学的に説明される。

思想内容である機械論的な生理学説そのものとはかく、語の系譜上、idea と materialis という連なりは直ちには飲み込み難く、また、カントの思想の発展に照らして見ても、ここでの立場と批判期の「超越論的観念論」(に基づく Idee や Vorstellung 理解)とは折り合い難いように思われる。にもかかわらず、この語句は当時広く用いられ、カントも(留保つきながら)後年まで使用し続けた。本発表は、この 18 世紀ドイツの哲学者たちによる「物質的観念」について、その来歴と射程の歴史的再構成を課題とするものである。

直接にはバウムガルテンから引き継いだものと見られるこの概念を、カントは決まってデカルトに系譜づける形で語っている。しかし、語句そのものはヴォルフの案出により、1734 年初版の『合理的心理学』第 112 節の次のような定義がその初出かと思われる。「対象によって感覚器官に刻印される運動をわれわれはこれから刻印された形象と呼ぶことにする。しかるに、そこから脳へと継続される運動ないしはそれによって脳に浮かび出る運動をわれわれは物質的観念 [idea materialis] と命名するだろう」。

デカルトに連なる仕方で導入したこの機械論的な物質 - 観念説を、ヴォルフは彼独自の心身二元論と予定調和説にしたがって、(唯物論にまで振り切らず、むしろそれに反対する形で)心身の相関の説明のために体系的・具体的に展開している。このヴォルフの用法と、それを踏まえながらも当のヴォルフとは異なる行き方をとるカントの用法を二つの焦点として、先行・並行する英仏の唯物論や後続する 19 世紀ドイツの観念論および唯物論との関係でも看過し難い 18 世紀ドイツの思想的コンテクストの一局面の描出に努めたい。

ホッブズからスミスへ

水田 洋

(名古屋大学名誉教授・日本学士院会員)

アダム・スミスは主著『道徳感情論』の終りに、次の著書として法学あるいは統治論を予定していることを明らかにしたが、死を控えた主著の第六版では、予定のうち生活行政の部分が『国富論』で達成されただけであることをわびた。しかしかれは1748-51年のエディンバラ公開講義以来、大学でも法学の講義を続けたことが知られているし、1958年にはその学生による筆記が発見された。このノートには1762年11月17日から1763年4月13日までという日付が明記されていることによって、19世紀末に発見された別の法学ノートが、それ以後のもの、即ち大学を辞職してフランスに渡る直前のものと推定されることになった。このノートには、前学年の講義が圧縮されているだけでなく、そこにはない序論が追加されていて、スミスがロティウスとホッブズの自然法学を継承し、伝統的な自然法思想を拒否したことが明らかであった。この序文はスミスを学会にデビューさせたケイムズ卿に対する、プロテジェの反乱ともいべきものであったにもかかわらず、最初の発見者エドウィン・キャナンはこの講義全体を『国富論』への前段階として評価したにとどまり、『グラーズゴウ版アダム・スミス著作・書簡集』の編集担当者も、辞任に当たって後継者のために書かれた講義要綱としかみなかった。しかしスミスはすでに『道徳感情論』の初版で、道徳哲学における自愛心と理性の役割についてのホッブズの貢献を高く評価していたのであり、法学講義序論はそれを補強するものであった。そこでの自然状態論批判は、伝統的自然法思想だけでなくホッブズの戦争状態としての自然状態にもむけられるべきであったが、スミスは『国富論』における自然的自由の体系によって、生活資料の豊かな生産と平等な分配を導入して戦争状態を回避しようとしたのである。18世紀のイギリス思想界ではホッブズは袋叩きだったといわれているらしいが、スミスのような後継者もいたのである。

チペンデールのシノワズリ —中国風彫飾と中国風塗装(ジャパニング)を中心に—

鈴木 ^{ひろこ} 裕子

(東京大学大学院)

17・18 世紀のヨーロッパでは、後に「シノワズリ」と呼ばれる「中国風」が流行した。シノワズリは、家具、陶磁器、織物、建築に、また絵画や演劇の題材に登場した。従来、シノワズリはひとまとめに、中国への幻想(オナー)や中国からの衝撃(インピー)に対するヨーロッパの中国像の表現と説明された。たしかに 17 世紀のシノワズリは中国の模倣に始まった。これに対して本発表は、T. チペンデールの家具を主な手がかりとして、18 世紀後半にはシノワズリが、ヨーロッパの伝統的技法と塗装方法の発展とを踏まえた表現へと変化したことを明らかにする。

18 世紀後半、イギリス家具のシノワズリは、パゴダやドラゴンなどの彫飾、ラティス細工、中国風の塗装(ジャパニング)、漆塗りパネルのヴェニアリング、チャイニーズ・ルームにみられた。特徴は、第 1 にシノワズリの立体的表現、第 2 に中国の塗装を越えたヨーロッパのラッカー、第 3 に中国風表現のコレクションにある。

第 1 に、彫飾とラティス細工は、塗装による平面的表現に限られていたシノワズリを立体的表現に変えた。彫飾も塗装もヨーロッパの技法だが、18 世紀に入ってほどなくイギリスでは自然な木目や彫飾が好まれるようになった。中国風の彫飾とラティス細工は、貴族の庭園やロンドンの公園に現われ、18 世紀中頃、リンネルによって家具装飾に持ち込まれたが、チペンデールの手でイギリス家具の装飾要素にまで高められた。

第 2 に、中国風の塗装(ジャパニング)は、18 世紀後半、中国風の彫飾とラティス細工に触発されるかのように家具装飾に戻ってきた。そこには白や青など、本来の中国の塗装(漆塗り)にはない色が使われた。それを可能にしたのは新たな樹脂と技法の発展だった。変化は色だけでなくデザインにも現われた。チペンデール作のベッド・ステッド(1770 年頃)のように、ヨーロッパの柄を組み合わせた新古典的デザインの白地ジャパニングも現われた。中国風とは、漆塗りのごとく堅牢で美しい光沢のことであり、必ずしも中国風の色や絵柄を伴わなくなった。

第 3 に、18 世紀後半にはチャイニーズ・ルームが作られたが、それは当時のイギリスの中国風表現を集めた部屋であり、もはや現実の中国とは関係ないものとなった。

共通論題 「表象、その多義性、変容と展開の諸相」

会場 立教大学 池袋キャンパス 4号館3階 4342号室

表象、その多義性、変容と展開の諸相

(趣旨説明)

鷺見 洋一

(中部大学)

先頃、勤務先の大学でネパールの夫婦が母国に現存する先住民族について興味深い報告をしてくれた。総数たったの167名という遊動部族「ラウテ族」は、猿の肉を食べ、森から森へとたえず移動し、経済活動は物々交換しか知らない。目で見、手で触れるものしか信じない「直接性」の人間たちなのだ。そのラウテ族に最近貨幣経済が侵入した結果、直接性信仰が崩壊し、部族全体が「間接性」で営まれる市場経済という表象システムに取り込まれてしまったのである。ラウテ族の伝統的な共同体が瓦解する日も遠くないという。

ラウテ族のエピソードに象徴されているのは、「近代化」と呼ばれる一連のプロセスが、「直接性」を犠牲にして、「媒介」や「代理」を特徴とする「間接性」の表象世界を現出させるにいたるとのことだ。

そもそも表象 (representation) とは大別して、1:「心に思い浮かべる → 表現、表示」系列と、2:「代表、代理」の系列とに分かれるが、両者はなにかの「再現」「象徴」であることにおいて共通している。近代ヨーロッパで、この特長が「近代」の諸問題と直結するのは、大革命以後、人間の精神活動、社会生活、政治活動において、「直接性」が通用しにくくなり、すべてが何かを媒介にして行われる「間接性」で定義され、定位されるようになった事情に通底している。以下、实例を挙げる。

1: **身体の領域**:「神に捧げる身体 (聖テレサ)」から「解剖され、観察される身体」へ。2: **政治の領域**:絶対主義、絶対王政から、代表制・議会制民主主義へ (国王一人の直接統治から、代表を選んで政治を行う間接政治へ)。3: **経済の領域**:貨幣経済から紙幣経済へ (「実質価値を備えた貴金属」から「紙という無価値で間接的な媒体」へ)、あるいは「物々交換」から「市場取引」へ。4: **絵画の領域**:写実から抽象へ (「写真のように対象を描く」から「モデルや対象のない絵画表現」へ)。5: **音楽の領域**:平均率 (「主和音を主体にして構築される和声システム」から「平等な12音列システム」へ) 6: **文学の領域**:シニフィエからシニフィアンへ (「意味されるもの」から「音や形式の遊び」へ)。7: **伝達メディアの領域**:口頭の談話から活字文化へ (「サロンやカフェ」から「日刊新聞やラジオ」へ)。8: **空間意識の領域**:家族・近隣・同業組合から、国民国家の「祖国」、ひいては「人類」へ。9: **時間意識の領域**:江戸時代の「刻」からグリニッチの「標準時」へ。10: **世界認識の領域**:「量」 (産業革命、大量生産と大量消費) から「速度」 (計時の習慣、スポーツ競技、自動車レース、など) へ。

以上の多様な領域にわたる地殻変動は、例外やズレや逆行などの現象を随伴し、また必ずしも18世紀という時代の枠内だけで説明できるものではない。シンポジウムには4名の会員をお招きして、それぞれの立場から、「表象」の東西を自在に語って頂く予定である。

第1報告

ゲーテにおける建築と表象

前田 富士男
(中部大学)

ゲーテ (1749-1832) は、生涯の折々に建築を論じた。ほぼ同名の題を持つ「ドイツ建築について(Von deutscher Baukunst)」(1772)、「建築(Baukunst)」(1788)、「建築(Baukunst)」(1795)、「ドイツ建築について(Von deutscher Baukunst)」(1823)の四つの考察がよく知られている。

これらの建築論はしかし、その内容に振幅が大きく、ときに理解も及びがたい。シュトラースブルク大聖堂の記述を通じてゴシック様式の最初の評価者という地歩を築く最初の論考に対して、イタリア旅行後の「建築」(1788)では、ギリシア建築オマージュが浮上する。1795年の記述は、建築空間内の身体的感性を取り上げ、1823年には、ふたたびゴシック様式のケルン大聖堂を称揚する。ときに優れた建築を詩という言葉の水準から論じ、ときに感性的経験の記述から把握する。長年にわたって論述を継続したゲーテの意図も明確ではない。

経験的に先行した感覚や知覚に即して生起し、しかもその契機となった事物が現前することなく成立する形像をとりあえず表象とみなすと、絵画や彫刻に比して、建築は本来、表象的な芸術ではない。とはいえ建築が造形芸術の根幹に位置し、多様な表象に接続していることもまちがいない。ゲーテ建築論の持つ独特な振幅は、建築と表象をめぐるこうした問題性を端的に示していよう。

しかし、ゲーテの建築論が自然科学者としての観察に支えられていることは、看過しえない。建築における部分と全体の関連を「微細な織物」として見つめ、建築体を「薄明」や「遠さ」という「見え方」の時空間性からとらえる手続は、生命形態研究や色彩論の観察と異ならない。ときには化学への関心さえ垣間見せている。ゲーテの現象観察の方法は、建築をめぐる伝統的な把握から離脱し、いわばメタ表象論とでも呼びうる領域に歩みこむのである。こうした取り組みは、フリードリヒ・シンケル(1781-1841)の特異な建築作品に明らかなように、ひろく建築制作における近代性を予示してもいた。

第2報告

18世紀における東北の表象、管見一二

坂口 昌明

(日本民俗学会会員)

1年前、新潟大学およびホテル・イタリア軒での本大会において行われた、柏崎を舞台とする説教操り「弘知法印御伝記」三段目（越後猿八座試演）をご記憶の諸賢も多かろう。放蕩無頼の郷土くずれが、家族に強い犠牲の酸鼻によりやく打ちのめされ、翻然と悔悟して残る半生を空海に帰依し、即身成仏の道を求めるという内容であった。17世紀末近くに江戸で初演されたと覚しい、このけれん味の多い活劇（全六段）の主人公の行状は、筋を追うにつれ、室町時代初期に実在した有徳の木食聖へと収斂してゆく。それは下総九十九里に生まれ、蓮乗寺を起点に東北一円を行脚、弥彦山西生寺で入定（つまり読経のうちにミイラ化）した弘知法印の残像である。聖骸は鈴木牧之が『北越雪譜』に描いた「弘知法印枯骸之図」の通りに現存するが、在地の篤信者や修験一行向けの開帳を除けば、その聖性が追懐される機会はまれであろう。18世紀末ごろ津軽の奥地に分け入った菅江真澄は、弘知の足跡が十三湖畔湯の沢の廃寺山王坊に及んでいた様子を記している。

欲望と刃傷と死があからさまに跳梁する「御伝記」の言説空間は、^{インスタレーション}「制 度」の硬い表皮で覆われていた。この二つは一對の現象として理解されなければならない。流離する法印といえども身分階層から離れることはなく、周縁にいて考え方にせよ生き方にせよ、衆生に方向転換を助言するのが精々であった。「御伝記」で夫に化けた馬子に臨月の身を斬られて死ぬ嫁柳の前は、近世の身分階層に囚われた大部分の女性たちの分身といえよう。

津軽ではイダコと呼ばれる巫女が、生産民としての彼女らの魂の結節点を形成した。そのクロノロジーは定かでないものの、在地の記録『永禄日記』から1697年夏、晩期縄文式土器の出土で知られる亀ヶ岡に、岩木山権現あんじゅが姫様の御母御前であるサカタマの明神が建立され、貴賤が群集して拝んだことが判明する。それは折しも元禄大飢饉の終息直後にあたっている。「サカタマ」とは、娘と生き別れ盲になった母が、再会して開眼した瞬間に叫んだ「世ハサガタマネナタモノダベガ」からきているのは、疑いない（注）。一方、同時期、弘前城下で禰宜町に山王権現の堂を建造中だったが、権現が早く移りたいと騒いで堂入りとなった。これは岩木山権現様の弟で津塩丸とお呼びすると併記されている。上方経由の説教節「さんせう太夫」が、津軽で男女別の祭礼へ分化したことは、表象論として興味深い。

（注）桜庭スエ口述、竹内長雄採録（1931年8月、坂口昌明編『お岩木様一代記』、津軽書房、2010年9月10日発行）。

第3報告

擬古と革命

渡辺 浩
(法政大学)

徳川日本においては、様々な学芸や遊びの分野で、実体とは異なるものに変身し、やっし、擬することへの偏愛があった。実体を代表し、表現するものではなく、実体とは異なるものへの擬態である。例えば、徂徠学派の擬古的な詩文、国学者たちの歌文がそうであり、彼等は、自己の名も変え、古人同士であるかのように書簡を交換した。また、芝居や浮世絵などにも、変身の主題は多い。そのような擬態・変身の願望は、さらに、三国志演義や水滸伝の「英雄」「豪傑」に自らを擬するいわゆる「幕末の志士」にもあったように思われる。いわゆる明治維新には、そのような擬態による革命という面があったのではないか。同様の面は、古代ローマの共和国に擬したアメリカ独立革命にも、フランス革命にもあったように思われる。

第4報告

représentation と representation

水田 洋

(名古屋大学名誉教授・日本学士院会員)

1943年5月のある晴れた日、日本軍占領下のジャカルタ、南方第五陸軍病院の下士官病棟に「国民を代表して慰問に参りました」という声がひびきわたった。プロペラとの接触で精神異常をきたしたという航空整備曹長が、代議士の言葉を理解したかどうかは知らないが、下士官待遇の軍属として入院していたぼくは、賛議会で国民を代表するとは、こうしてジャワまで買い物に来ることなんだなと思った。買い物というのは、当時のジャカルタにはオランダ領東インドの首府として、電気冷蔵庫からランド・ピアノまで、なんでもあったからである。

国民の代表というものに思いがけないところで出会って、気がついて見れば類似の現象や議論が身の回りにいくらでもあった。挙句の果てに岩波文庫に、ジョン・ステュアート・ミルの代議制体論の翻訳をすることになり、そのタイトルの *representative* の原形の *representation* を英和辞典で引くと、最初に「代表」が挙げられ、次が「表現」である。ところがアクサンがつく仏和辞典では、「表現」が先で「代表」が後である。念のために OED を引くと、同じ英語辞典でも *representation* の説明八項目は、「presence」や「appearance」から始まって、7番目に「法律上の代表」、8番目の「政治における代表」でおわっている。

用例を見ると、はじめのほうでは、まず個人の態度を意味し、ついで神や聖人の画像の類似性を意味し、それらのあとに法律と政治がくる。こういう事情なので、*representation* は英語でもオリジナルには「表現」を意味し、個人主義、私有財産制度の発展とともに「代理」を意味するようになり、民主主義によって「代表」を意味することになった、といていいのではないかと思う。二つの用例をあげられているエドモンド・バークは、そのひとつで、議会における代表が確保されなければ税金協議に応じられないといい、つぎにはフランスの三部会における第三身分の代表についてである。バークについて伝えられているもうひとつの用例は、国会議員は国民の代表者として国全体の政治を運営するのであって、それまでに各地方の名望家が地域の利害を代表していたのとは違うのだという、かれ自身がブリストル選出の下院議員になったときの発言である。彼はアイルランドの出身で、特別の背景なしに社会のはしごを上ってきたのであり、背景がないことを裏返しにしたのが、この国民代表論であったともいえるだろう。浮動する小市民知識人の一例である。

代表の例はきわめて身近にあって、正確に言えば身近にあるべきであって、日本国憲法第43条は「両議院は、全国民を代表する選挙された議員でこれを組織する」と規定している。だがここで全国民を代表するといわれるのは、バークの場合とは違うようで、戦前戦後を通じて優れた憲法学者であった宮澤俊義は、議会が代表的性格を持つとは「国民全体のうちに存する各種の政治的意見ないし傾向の少なくとも支配的なものが、議会での議員の行動において、具体的に主張される最大限の公算が存すること」とであると書いている。これは党議拘束や比例代表に通じる考え方である。じつはこのふたつの引用は、日本学士院の月例報告会での樋口陽一さんのレジュメからの孫引きなのだが、二つのあいだの引用でコンドルセはつぎのようにいっている。「人民の受任者として私は、彼らの利益に最もかなうと私が信じるところを行うだろう。彼らは、彼らの考えではなく私の考えを

述べさせようとして、私をここに送ったのである。私の意見の絶対的な独立性は、彼らに対する私の第一の義務である。」コンドルセからコンスタンへのながれのなかで、これはどうなるのか。

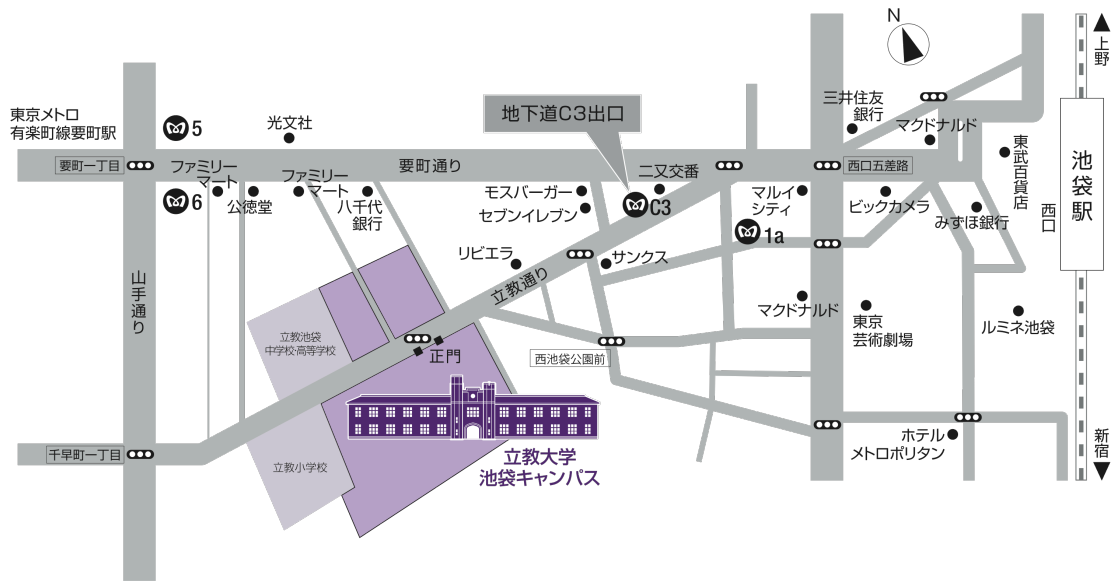
「表現」の例といえ、気がつけば身近にあった。アダム・スミスの『修辞学・文学講義』である。これは反修辞学講義だといわれるくらいで、シャーフツベリの「華麗・荘重で装飾的な文体」を全否定して、率直平明なビジネスの用語としての散文を推奨したものである。「一般に言語の装飾とか花とか呼ばれている寓喩的比喩的などの表現は、文体を曖昧で混乱したものにする傾向が、非常に強い。表現に変化を与えようと大いに努力すると、比喩のあいまいさという地下牢におちこむ。シャーフツベリ卿は最もこの間違いを犯しやすい人である。」ここで表現といわれているのは **expression** であって **representation** ではないが、このようにひたすら率直平明を主張するスミスに対して、後継者のブレアもいささか辟易したらしく、謝意を述べるとともに、学問の道には花も添えなければならぬと付け加えている。



立教大学

池袋キャンパス 〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1 TEL:03-3985-2202 (広報課)
 新座キャンパス 〒352-8558 埼玉県新座市北野 1-2-26

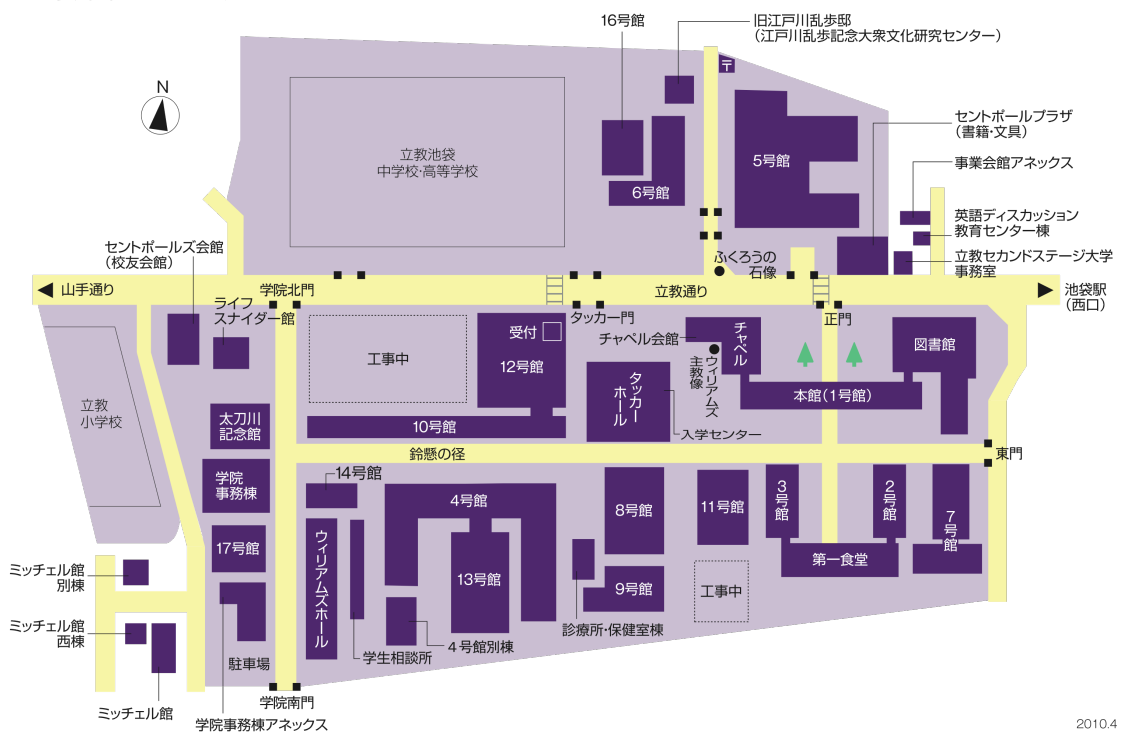
池袋キャンパスへのアクセス



立教大学

池袋キャンパス 〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1 TEL:03-3985-2202 (広報課)
 新座キャンパス 〒352-8558 埼玉県新座市北野 1-2-26

池袋キャンパスマップ



2010.4

2011年4月 発行

日本 18 世紀学会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部 増田（仏文）研究室

Tel. / Fax. 075-753-2766

jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp